

筑紫夫人

小堺昭三



筑紫夫人

小堺昭三



光風社書店版

筑紫夫人

★定価はカバーに表示してあります

《検印省略》

著者 小堺 昭三

発行者 豊島 澈

印刷者 秋田 宗慶

発行所

株式会社光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(四一)〇二三八番
振替東京8112913番

乱丁・落丁は御取替いたします。

0093-049501-2265

目次

朱の記憶

七

黒い恋人

三

白い女

六

危険な黄色

二

紫の関係

三

魔

一七

女の戦争

一七

戦いのあと

二三

不幸な幸福

二四

装幀
難波淳郎

筑紫夫人

朱の記憶

筑紫よ　かく呼ばへば

恋ほしよ　潮の落差

火照沁む　夕日の潟

ふるさとの海辺の美しさを、北原白秋はその詩『帰去来』に、かく謳う。

「夕日の潟」の有明海にそそぐ九州でいちばん大きな筑紫二郎（筑後川）に肩抱かれて、久留米市はある。筑紫路の中核都市、有馬氏二十一万石の旧城下町。

寛政年間、この地の井上でんなる女性が織った久留米かすりの産地として栄えてきたことは記述するまでもないことだが、のちにこの街は「三者の町」ともよばれるようになった。その賑わいは明治、大正をへて、太平洋戦争の敗北の日まで続いている。医者に芸者に武者（軍人）が多かった町、という意味である。

ここは陸軍第十二師団があった。上海事変の肉弾三勇士でその名をとどろかせた工兵第十八大隊、日華事変で武名をはせた西住戦車隊、歩兵、騎兵、野砲などをふくむ総合師団であり、また近郊には偵察機部隊である陸軍太刀洗航空隊もあった。その数二万人という。

この総合師団は太平洋戦争においてもかずかずの武勲をたてて、熊本第六師団とともに日本最強の精鋭だと賞讃され、したがって日曜日や祭日には外出を許可された、それら凛々しい軍人たちがこの街にあふれていた。各地から面会にきた家族や両親たちと初々しい新兵さんの、稻荷寿司やカレーライスをわけ合って食べている光景が、あちこちの大衆食堂で見られた。乳呑児をおんぶした若妻が旅籠の階段で別れざわ、一等兵である夫にこんどはいっ面会できるのかと、寝乱れ髪をつくろいながら涙ぐんでいた。

英雄ほど色を好むとみられたわけでもあるまいが、軍人相手の料亭や待合、遊廓もにぎにぎしく栄え、芸妓衆に女郎衆が大勢あつまっていた。

絃歌さんざめくその巷は紺屋町と新町にあった。紺屋町の芸者衆の元締めである検番のことを「紺検」とよび、新町のほうを「新検」といった。階級差のきびしい軍人であるだけに、ここでも格が重んじられ「紺検」は大隊長だの部隊長だの佐官級以上が利用し、「新検」は中隊長とか小隊長などの尉官クラスの将校らが常連であった。

こういう巷は隠れるようにしてあるのが世の常だが、ここでは紺屋町も新町も市街の中心地にあった。武骨な将校さんがうなる詩吟、今様に合せての三味の爪びきが奥座敷からきこえ、粋な有明芸者が桃色のけだしもあらわに「ぼんちかわいや寝んねしな……」を舞う。白昼堂々と彼女たちをしたがえ、篠山町の市公会堂の前にあった肉弾三勇士の銅像を背景にして立ち、記念写真をとらせるひげの部隊長もいた。

有明芸者というのは、冒頭の北原白秋の詩にもあるように、潮の落差がはげしい有明海に因み、

彼女たちの情の深さを指したものである。

下士官や兵隊たちは「紺検」や「新検」の女たちには縁がなかった。そんな場所に入入りできる身分ではなく、外出日になると彼らは遊廓へ殺到した。遊廓は白山町、原古賀町、東町などにあり、いまでいう「時間」が一円五十銭から二円。女郎の多くは佐賀や天草あたりの貧農貧漁の娘たちで、「兵隊さん、その偉か兵隊さん。ちょこちょこつとよかじやんの」

「爆弾三勇士が泣かつしやるばい。思いきつて突き込んでこんの」

必死の媚笑をうかべ、その晩の客にありつこうとした。

娼婦たちのからだはお化粧や体臭の馨ぐわしさはなく、土の匂いがあった。そして彼女たちの赤い鹿の子しぼりの布団には、つぎつぎ登楼してくる兵隊たちの帯革と汗のにおいがしみついていて、彼女たちを組み伏せいっときも休まない飢えた万年以上等兵もいれば、故郷で待つ婚約者や姉妹たちを思いだしてか抱くことさえできず、枕もとでおいおい泣いている学生のような新兵もいた。かと思うと、一夜の契りが忘れられなかった年若い二等兵が、戦場へ送られるのを嫌さに女郎と無理心中をはかる惨劇、天国で結ばれるほかないと情死行する古風な悲劇もしばしば起った。

赤いしごきでかたく結ばれ合ったそれら二つの死体が、水量ゆたかな筑後川の流れに浮きつ沈みつ漂っていた。払暁のことである。

河原へひきあげられた兵隊と娼婦の死体は赤いしごきを切って分けられ、菰がかぶせられ、まもなく通報をうけた数人のいかめしい憲兵が駈けつけてきて、

「帝国陸軍の面汚しめが！」

「河童のエサにでもなつてりやよかつたんだ」

二等兵の死体だけをトラックへほうりあげて、いずこへともなく運び去っていった。

残された娼婦のそれは孤の下から、白足袋をはいた二本の蒼白い脚をつきだしていた。

女郎屋のおかみ、朋輩たちが仏をとりまき、

「水に沈むときゃ苦しかったやろね、かわいそうに。この子になんの罪があったというとね」

お化粧やけた顔を袖でかくし、すすり泣きしながら合掌。恋し合つて天国へいつてしまふたのやから最後まで添いとげさせてやればよいものを……と去りゆく憲兵隊のトラックを恨めしげに見つめていた。

それから朋輩たちは死体の所持品をさがしはじめた。たいていの娼婦が帯のあいだに、三十円か四十円の金額が書きこまれた郵便貯金の通帳をたばさんでいた。なかには鉛筆で拙く走り書きした遺書を添えているのもいて、それには「とうさんかあさんカンニンね。とうさんかあさんが楽になるようにと思つて身売りしたあたしだったのに」とあった。

娼婦や芸者たちばかりではない。年ごろの娘が身投げしていることもあった。街の食堂ではたらく給仕やゴム工場の女工たちである。

彼女たちのおおかたは妊娠していた。消防団員たちにひきあげられたずぶ濡れのその死体の、はらんでいゝ白い陶器のような腹が、川面の照り返しにつやつやと光っていた。彼女たちの乳房はまだ堅く、熟れてない白桃のように新鮮だった。消防夫も土堤に群がった野次馬らも、

「ありやアもう七カ月にゃなつとるばい」

「相手はやっぱし兵隊じゃろ」

熱っぽい視線を、つやつやしたその腹や乳房に賤しくあつめていた。

そのたびに町の開業医が駈けつけてはきたものの、もう手首の脈をとったり胸に耳を当てがう必要もない、冷たい骸むくろと化していた。

彼女たち素人娘は、恋人の戦死の悲報に生きてゆくことのむなしさを感じたり、私生児を産まねばならぬ世間の嘲笑に耐えられなくなったのであり、そうした投身自殺は、

ツクツクオーシ、ツクツクオーシ……。

と筑紫恋が樹かげで鳴きはじめる夏の終りに多かった。

筑紫恋はもの哀しい秋を告げてはいるが、陽はなんともやりきれない暑さで照りつける。

こんな悲劇がひんばんにあるので開業医がふえていった、というわけではない。ここには師団付の陸軍病院があり、久留米医学専門学校が大阪のはじめに開校されて以来「武者に芸者に医者が増えた」かたちになったのだ。医学生はこの町のインテリで、良家の子女たちの憧れの的であった。久留米女は色白で、色白だからなおのこと久留米かすりの着物がよく映える、といわれる。色白なのは「筑後川の川水を産湯にしたからだ」とこの地方の人たちは自慢してきた。

江原美帆みほも羽二重もちみにたいに色白の肌をしていて、黒々とした瞳の、すらりとした大柄な娘だった。五本の指がよくしなない、爪が小さなさくら貝のように美しかった。

江原美帆子が生れた昭和六年は、満洲事変勃発の年であった。物心ついたところから彼女は、兵隊

と娼婦の情死行や脱走の話をよく聴かされた。素人娘たちの身投げのことも、よく覚えていた。語ってくれるのは祖母の志乃^{しの}で、志乃はこの種の情報をどこで仕入れてくるのか、得意の筑前琵琶^{びわ}のかたまりを唸るかのような熱のいれ方で話していた。

黒いつぶらな瞳をくりくりさせて、名物の粟おこしを食べながら美帆子は聞いていて、

「どうして兵隊さんはお女郎さんと死にたがるン？ あたい兵隊は大嫌い。お医者さまのほうがずうっと好き」

ませた口のきき方をした。

「そんなこと言うんじゃないよ、おとうさまの前ではね」

そのつど祖母は笑ってたしなめたが、ミホはお惻口だね、そのほうがほんとうはいいんだよ、という目顔になっていた。

祖母の志乃がたしなめるのは息子——美帆子の父親が職業軍人だからである。陸軍大尉、久留米工兵第十八大隊の中隊長だった。

志乃は孫娘の美帆子を久留米医専の卒業生と結婚させたがっていたが、父親の江原大尉はやはり、自分の娘を将来性のある青年将校の妻にさせたがっているふうであった。とは言っても、美帆子はまだ七歳になったばかりのころである。大人たちの勝手な夢にすぎない。

江原家は日吉町にある。「新検」の新町と隣り合せになっていたが、料亭や待合のある絃歌さんざめく巷とはうって違って、こちらは赤レンガの塀がつづく住宅地となっていた。師団勤務の尉官クラスの家族たちが多い軍人町みたいなもので、当時は赤レンガの塀に囲まれた古めかしい家はた

いいてが職業軍人の住居とされ、主人は軍馬にまたがり馬丁の役目をする兵卒を一人したがえ連隊へかよったものである。

毎朝、赤レンガの門の外で馬がいななき、ばっかばか蹄鉄の音がする。いまでいえば、重役の邸へくる会社のお迎えの車みたいなものだが、美帆子には馬のことではたいそう厭な想い出があった。軍人の女の子たちは、赤レンガの塀によりかかって日向ぼっこしたり人形を交換したり、そこいらにゴザをひろげてままごと遊びに興じた。ばっかばか蹄の音がし、父親たちが兵營からもどってくる夕刻まで、その遊びはつづく。ときには近くの日吉神社の境内へいって、銀杏の大樹の下ではじきすることもある。

長いサーベルを腰にさげて栗毛色の駿馬にまたがっている江原大尉は、痩せぎすで浅黒いかめしい貌かまをしている。だが、長靴の拍車をがちがち鳴らしながら鞍から長身をおろすとすぐ、美帆子を抱こうとする。

そのときの父の顔は、とたんにやさしくなる。美帆子はその瞬間の父は好きであつたが、タバコくさい口ひげを頬にすりよせてきて、

「ミホ、お馬に乗りたかないか。それ、乗せてやるぞ」

軽るがるとかかえあげられるともう、反射的に抵抗したくなるのであつた。

「厭だア、イヤあッ」

脚をばたばたさせ、ほんとうに厭がつた。紅いビロードの花緒の日和下駄がすっぱり抜けて飛んでいった。両腿をいっぱいに左右に開いてまたがらねばならない、その恰好に対する本能的な女の

羞恥心が、七歳の彼女でもじっとさせておかないのである。

そればかりではない、鞍の汗ばんでいるような皮革の匂いが、男の体臭のようでもあり、轡くらわをはめられた馬の、ぬらぬらした唾液がついている口まわり——どういいうわけかこれまた本能的に鳥肌だつ思ひにさせられる。

「そうか、そんなに馬が嫌いか」

必死の抵抗にあきれながら父は苦笑し、すぐに解放してくれた。男の子がいない寂しさがよぎってゆくかのような表情であった。

ところが父は、なぜかどうあつても強引にまたがらせたがる日もあった。そんな場合、美帆子が泣いてもわめいても鞍の上におしあげてしまう。メリンスの花柄の着物の裾がたくしあがつて、細く白い馬関ねぎのような美帆子の脚がむきだしになっているのを、父は口ひげに笑みを漂わせて見ているものの、その目はギラギラした脂が浮いているみたいであった。

「……怖いよこわいよオ、おばあちゃん！」

助けをもとめてもおろしてはくれない。股が裂かれるように疼いたく。

「ミホのおとうさまは若いころ、厭いとがるおかあさんを馬に乗せたことがある。腰巻ひとつの裸にしてだよ、お嫁にきて間もないころなのに」

そんなふうに祖母が話してくれたことがあったのを、美帆子は疼きに耐えながら想いだした。父はなぜそんなむごいことをしたのだろうと思ひ、厭いとがる子どもの自分までどうしてまたがらせたがるのか、と恨めしかった、美帆子が三歳のときその母は病没、父は再婚していない。